

説 教 「その名はヨハネ」

(ゼファニア書 3 章 14 節-18 節、ルカによる福音書 1 章 5・25 節)

2022 年 12 月 11 日 主日礼拝

日本基督教団仙川教会

大串肇

アドヴェントの朝わたしたちに与えられました聖書のみ言葉は祭司ゼカリアとその妻エリザベトに与えられた一人の子「ヨハネ」の誕生物語です。イエス・キリストが誕生なさる直前に、そのご生涯と深くかかわることになる人物こそ、洗礼者バプテスマのヨハネです。この人物は謎めいています。15-17 節にあるように「主のみ前に偉大な人になり」、「既に母の胎にいるときから聖霊に満たさされていて」、「イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせ」、「エリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する」人であると言われていいます。このヨハネとイエスのご生誕の記事が交錯しながらクリスマス物語は描かれています。

ヨハネの両親である、父ザカリアと母エリザベトは二人とも祭司の家系でありました。そこでザカリアはエルサレム神殿の祭司になりました。しかし、二人には子どもがいませんでした。しかも高齢でした。古代では子どもが与えられないということは将来がないことを意味していました。このような境遇は神の罰を受けていると思われていました。旧約聖書にも同じような境遇に苦しんでいた人たちに出会います。族長アブラハムと妻サラも同じ問題で苦しんでいました。またハンナという女性も同じでした。

ザカリアもエリザベトも「神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった」と 6 節には明確に記されています。ですからどうして神を信じ正しいことを行う人がこのような恵まれない境遇なのか。ここには不条理に満ちた人生の問い、容易には解決できない試練の問題が隠されています。8-9 節をご覧ください。

さて、ザカリアは自分の組が当番で、神のみ前で祭司の務めをしていたとき、祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。

エルサレム神殿で香をたくことは、エルサレムの祭司とりましては一生に一度あるかないかの重要な務めでした。まさに、待ちに待った人生のひのき舞台で、

神殿に天使が現れこう語ったのです。

天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ（13-14 節）

「あなたの願いは聞き入れられた」という天使の言葉から、子どものないことで彼らが長い間悩みぬき、神に祈っていたのではないかと思われまます。彼らの長い祈りの末に、その祈り願いに応えるかのように、彼らの願いが聞き入れられたのです。そのことを天使は告げました。それはこの老夫婦に一人の男の子が与えられるという喜ばしい知らせです。

他方、ザカリアにとって、天使の登場も、その嬉しいはずのニュースも予想外でした。そして彼は恐れ、不安に陥ったのです。これはわたしたちにとりましてはもっとショックではないでしょうか。神殿の祭司であっても人間です。深刻な悩みや苦悩があったのです。しかしながら、ゼカリアは信仰深く、敬虔であったからこそ、祈っていたのです。しかし皮肉にも、この天使の登場はゼカリアの弱さを浮き彫りにしたのです。ザカリアは天使にこう述べました。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています」（18 節）と。

ザカリアは自分の弱さ、自分の限界を十分に知っていました。「わたしは老人です」という言葉にはそういう現実の厳しさに対する洞察に基づいています。また、深刻な嘆きがそこに言い表されているのではないのでしょうか。ですから、天使の喜ばしい言葉を信じることができなかつたのです。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか」という嘆きに満ちた問いの背後には、天使に対して彼は目に見える確かさ、すなわち保証を求めたとは言えないのでしょうか。そこで天使はこう答えました。

天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかつたからである。」

天使の言葉によって、ザカリアの不信仰が明らかにされてしまいました。これはショッキングです。神殿で祭司が神に願っている。誰が見ても経験で信じ深いように思えます。ところが、実際は、ゼカリアは本当に神を信じていたのでは

うか。天使の言葉を聞いても神のみ力を信じることができなかつたのです。しかしそのような弱く、不信仰なザカリアを神は見捨てませんでした。「時が来れば実現する」と天使は約束しました。

なるほど、天使の語ったようにゼカリアは何も語るができなくなりました。しかし天使が約束した通りにエリザベトは身ごもりヨハネが誕生したので。預言者の誕生という出来事は神のみ業であり、救いの御業です。このヨハネこそ更に大いなる奇跡のために遣わされた最後の預言者です。「エリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する」者でした。他方、わたしたちは神の救いを心から喜び、信じることさえできない。これがわたしたち人間の弱さであります。

主イエス・キリストの生誕はわたしたちの常識や予想を超えた神の愛のみ業です。キリストはその愛の徴であり保証なのです。キリストこそがわたしたちの喜びである。その知らせが今も尚わたしたちに向けられており、同時にこの喜びに加わることへ招いているのです。

その後、妻エリサベトは身ごもって、こう語りました。「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました」

(25節)。こうして、このヨハネ誕生物語はエリザベトの賛美あるいは信仰告白で結ばれています。他方、ヨハネが誕生するまで語ることでできなかったザカリアは開口一番、賛美を持って神に答えています。「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を」(1章 68節。それ以下を参照)と。

賛美も告白も同様に、神の愛に対する真の礼拝です。主イエス・キリストの恵みに対する感謝や喜びを心から告白し、神を賛美する。それがまことのクリスマスの礼拝です。わたしたちにも「この喜ばしい知らせは」は今朝届いています。わたしたちは自分の弱さを知ると同時に、今こそイエスの愛を信じ、「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を」と互い告白し、神の愛に応えるべく歩みだしたいのです。ご一緒にお祈りいたしましょう。